

4 泊 5 日の兵庫県自然学校が参加児童の自己効力感に与える影響

内藤照久¹⁾、徳田真彦²⁾、伊原久美子²⁾、西垣幸造³⁾

1) 大阪体育大学体育学部、2) 大阪体育大学、3) 尼崎市立美方高原自然の家とちのき村

自然学校、自己効力感、変容要因、児童

<緒言>

現在、兵庫県の学校教育において自然学校と呼ばれる自然体験プログラムが、全国的に見ても盛んに実施されている。この活動は、文部科学省が、国庫補償事業である自然教室推進事業を展開し、生きる力や自己効力感等の育成に向け、全国の公立小・中学校に学校行事として取り入れを推し進めている野外教育プログラムの一つである。しかし、今日において、自然教室推進事業創設当時の5泊6日程度と類似形態での実施に至っているのは、兵庫県を含んだごく少数の地域のみであり、全国の小・中学校における野外教育への取り組みは進んでいない。また、自然学校を対象に効果検証が行われている研究がいくつか見られるものの、多様な観点から効果検証を行う必要性も指摘されており、今後さらなる研究の蓄積が必要である。そこで本研究では生きる力の先行要因ともされている自己効力感に着目し、その変容と変容要因について検討したい。

本研究の目的を、兵庫県自然学校における参加児童の自己効力感の変容を明らかにすることとした。

<研究方法>

本研究の調査対象は、M小学校に在籍しており今回の自然学校に参加した5年生132名を対象とした。データの収集時期は、事前調査は10/25、26日、事後調査は11/7、8日に回答してもらった。また、目的を達成するために、既存自己効力感尺度の「General Self-Efficacy Scale for Children-Revised(以下 GSESC-R)」および独自に作成した自由記述の質問紙を用いた。項目は、自己効力感

に影響を与える4つの情報源うちの3つ「遂行経験、代理経験、言語的説得」について、自然学校実施中にどの程度生じたのかを「まったくなかった」「あまりなかった」「少しあった」「たくさんあった」の4段階で自己評価してもらい、その後、体験がどのプログラムで生じたのか、具体的にどのようなことがあったのかを記述してもらった。分析方法は、GSESC-Rにおいては事前と事後での変容を明らかにするため、対応のあるt検定を実施し、相関関係については、各情報源別で体験頻度を点数化したものと、GSESC-Rの事前と事後の変化量について相関分析を行った。質的調査については、名前が挙げられたプログラム名とそのプログラムの出現回数について単純集計を行った。

<結果及び考察>

今回、GSESC-Rを用いた調査結果について、対応のあるt検定を実施した結果、2つの因子を合計した平均の数値において、事前が48.22、事後が49.66を示し、有意な得点の向上が認められた。次に、因子別の結果においては、「安心感」の因子は、事前が24.15、事後が24.80を示し、有意な得点の向上は認められなかった。一方、「チャレンジ精神」の因子は、事前が24.07、事後が24.86を示し、有意な得点の向上が認められた(表1)。これらの結

表1 t検定の分析結果

因子	結果 (n=101)				t検定
	Pre		Post		
	Mean	SD	Mean	SD	t
安心感	24.15	6.13	24.80	6.41	1.47
チャレンジ精神	24.07	5.22	24.86	6.04	2.09*
全体合計	48.22	9.66	49.66	11.36	2.09*

*p<.05 (両側)

果が生じた理由として、不慣れな環境において他者と共同生活を行うという非日常的な時間を過ごす。そのため、普段の生活に比べて何かに挑戦することが多く、その活動の中で苦労や過酷さを感じながらも、それらを乗り越えるといった成功体験を得たことで自己効力感が向上したと考えられる。「安心感」において有意な向上が認められなかった要因としては、今回実施された自然体験プログラムでは、精神的ストレスを与えるような体験が少なく、影響がなかった可能性があることや、すでに1年の間には運動会などといった学校行事も行われていることから、すでに他者との間に関係性が構築されていたことなどが要因ではないかと考えられる。

GSESC-Rの事前と事後の変化量と、各情報源における体験頻度の点数について関係性を明らかにするため、相関分析を行った結果、GSESC-Rの2因子を合計した変化量と3つの情報源の相関係数及び有意水準を算出した結果、遂行体験($r=.352, p<.01$)および言語的説得($r=.232, p<.05$)に弱い正の相関が認められた。次に、「安心感」の因子において、遂行体験のみ、弱い正の相関が認められた($r=.219, p<.05$)。さらに、「チャレンジ精神」の因子においては、遂行体験($r=.383, p<.01$)および言語的説得($r=.23, p<.05$)に弱い正の相関が認められた。このことから、遂行体験と言語的説得が自己効力感の向上に何らかの影響を与えたと考えられる。特に、遂行体験は両因子において弱い正の相関が確認できたことから、自身の行動によって生じた成功体験は自信に直結しやすいことが考えられる。一方、代理体験はどちらの因子に対しても相関が認められず、自然体験プログラムが影響しているはいえない結果であった。この結果が生じた要因として、今回実施された自然体験プログラムにおいては、他者の行動を観察する機会が少なかったということが考えられる。

自由記述の回答を単純集計した結果、遂行体験

に影響したと回答された自然体験プログラムは、テント設営(60件)、野外炊事(51件)、生活(20件)、ネイチャークラフト(19件)、アドベンチャーラリー(18件)、枝豆収穫(17件)、キャンプファイヤー(5件)、ナイトハイク(2件)、美方を知ろう(1件)であった。次に、代理体験に影響したと回答された自然体験プログラムは、テント設営(44件)、生活(37件)、野外炊事(33件)、キャンプファイヤー(25件)、枝豆収穫(9件)、ネイチャークラフト(5件)、アドベンチャーラリー(4件)であった。最後に、言語的説得に影響したと回答された自然体験プログラムは、生活(44件)、テント設営(33件)、野外炊事(24件)、ネイチャークラフト(10件)、枝豆収穫(9件)、アドベンチャーラリー(8件)、ナイトハイク(6件)、キャンプファイヤー(2件)であった。遂行体験、代理体験、言語的説得、いずれの回答においても、生活、テント設営、野外炊事といったプログラムの回答が多い傾向が伺えた。このことから、自己効力感の向上には、自身の生活に近い体験活動、つまり、衣・食・住に対して行われるプログラムがより効果的に作用するのではないかと考えられる。

<課題と展望>

本研究で使用した尺度は、日常生活を想定した質問項目が設定されており、自然体験プログラムのような非日常下で実施される活動による変化を全面的に捉えられていない可能性がある。そこで、自然体験プログラム特有の自己効力感の観点がある可能性も考え、概念整理等検討していく必要があるだろう。

<主要参考文献>

福井 至ら(2009). GSESC-R 児童用一般性セルフ・エフィカシー(自己効力感)尺度
<http://www.kokoronet.ne.jp/fukui/gsescr/index.html> (閲覧日 2023年12月30日)